



昭和の禪海和尚

—世にも珍らしい美しい話—

一 記 者

騒々しい世の中がやつと静まりかけた明治廿一年の春もやがて逝かうとする四月のある日だった。西郷さんの戦争があつてから十年。この九州の南端にある佐多村にも承らぐ平和が續いた。征南の役の際の憤怒や怨恨もだん／＼薄

らいで、人々はたゞ平和を楽しんで居た。その日も泰平の御代に適はしい麗らかな日であつた。春も云つても、この南國ではもう夏だった。じり／＼灼きつけるやうな陽光が野良仕事の人々を悩ました。漸く太陽が西に傾き初めた

頃、村はづれに飄然と現はれた男があつた。彼はもう四十をいくつも越したと思はれる筋骨の逞しい男であつた。彼はもう永らく旅をしたと思へて着物は塵にまみれて薄汚なかつた。身體も餘程つかれて居るらしい。足をひきずるのも懶うさうである。村人等は手を休めながら好奇の瞳を輝かして、この不意の訪問者を望めた。だが、やがてその好奇の瞳は冷たい嘲りを帯びて來た。犬までがこの他國者に劇しく吠えついた。彼は放浪者だ。他國人なのだ。村人は排他的であつた。田舎はどこでもさうだが、鹿兒島は傳統的にその風が強かつた。

x x x x

彼は村人の冷たい眼に迎へられたが、どこかこの土地が氣に行つたらしい。彼はこゝを安住の地と定めた。彼は山奥深く入つて、一軒の小屋を立てた。こゝで彼は炭焼を始めた。それから彼は一日黙々として働いた。

やがて年が變つてまた春が來た。だが、彼は相變らず黙

黙として働いた。やがてまたその年もすぎた。二年、三年歳月はだん／＼過ぎて行く。初め白い眼で見た村人もだんだん彼になれて來た。だが、彼は黙々として炭を焼いて居た。村人は、彼の姓名の「山中市太郎」こそその土佐生れなるこゝを知り得たのみで、その好奇心を僅かに満足させ得たに過ぎなかつた。歳月は容赦なく過ぎた。日清の役も彼は人づてに聞かされた。さうして多くの若い村人を戰場に送つた日露の役も。

五年、十年、十五年、廿年、歳月は流れてゆく。だが、彼は黙然として働いた。いくらかの蓄へも出來た。それで田畑を買つた。さうして、亦働いた。その富はだんだんこふえた。だが、彼は相變らずひみりほつちで暮した。時折り村人のたれかれが彼にその經歷を訊ねたが、彼は笑にまぎらして答へなかつた。

やがて、明治は大正にかはつた。彼も頭は白髪に蔽はれ、そして六十をいくつも超えた。だが彼の過去は依然として村人に取つては謎であつた。

その頃彼は最早、働かずして一生を逸るに十分なる資産を持つて居た。でも、彼は相變らず働いた。

大正も二年、三年も過ぎ、大正七年もなつた。

この村の島泊部落から伊座敷に通する一つの里道があつた。彼はこゝを毎日のやうに通つた。その路は鬼の通ふ逕のやうな、非常なる悪道路であつた。すべての村人が難澁をしてゐた。彼もそのうちの一人であつた。彼はこれをごうかし度いと思つた。然し齡既に七十五であつた。今更自分の壽命を考へた。死がだん／＼近づくのを感じた。彼は全くの孤獨人であつた。彼はこの他國者を除々ではあつたが、いたはつてくれた村人に對する感謝をあらはしたいものと思つた。

その年の春のある日。何事かを決心して村役場に出かけて行つて、村長に面會した。村長はこの老翁が何を云ひ出すのかをいふかりながらその面をながめた。ところが彼の申出は村長を驚かした。

「實は私は自分の一生の事業として、あの島泊から伊座敷

に至る間の道普請をし度いと思ふので御座います。私にはこれ云つて累系も全くないのですから、私の全財産を失くしてもいゝと思ひます。只お願ひ云つては私が死ましたまきに墓石の一つも建て、戴ければ結構です」

村長はこの七十五にもなる他國者の老翁の健氣な言葉に感激した。村長は直ちにその志を容れたのである。

x x x x

翌朝彼は道普請を始めた。島泊から伊座敷まで凡そ二里はある。その長い道を彼は獨力で開鑿しやうとするのだ。彼は鍬を奮つた。一日にいくらも捗どらなかつた。彼はもう七十五なのだ。だが、絶望はしなかつた。そしてその念願を果すことを神に誓つた。その翌日も早朝から、さうしてその翌日も。

雨の降る日もあつた。風の吹き荒む日もあつた。だが彼は撓まなかつた。そして致々として働いた。僅か宛擴げられゆく道が彼には無上のたのしみであつた。

寒い冬が来た。多くの老人は炬燵にもぐり込んで居る。だが、彼はこつくと働いた。道はだん／＼出来て行つた。村人は驚異の眼をみはつてこの七十老人の他國者を望めた。彼は山を削つた。山を削るのには可なりの勞力がいつた。又彼は石を掘り出した。かくして幅四尺程の立派な道がだん／＼つくられて行つた。一年の歳月が立つた。二年目が来た。道はだん／＼出来る。石割には石工を備つた。かくして、彼の資産は一日々々減つて行つた。それに反比例して道はだん／＼竣功して行つた。やがて幅四尺、長さ約二里の立派な道が出来上つた。實に約二年の日子を費したのである。彼の喜び、村人は初めて心からの喜ばしさを彼に見た。だがその時、彼は又この村に流れついたさきのやうに、無一文の素寒貧になつて居たのである。

x x x x

これはまごころは美しい話である。立派な社會美談であ

る。然も主人公たる山中市太郎翁はその過去の經歷を語らないため、何んもなくこのエピソードそのものにロマンティックな香がする。だが、翁の經歷はさうであらうとも、翁の事蹟はたしかに美しい。翁のやうな心がけの人々が世の中に多かつたら、共產黨の、彈壓の、何んのかんの云ふ騒しい世の中にもならなかつたらう。翁は平和の勇士である。

特にこの話が私を惹きつけたのは、そのロマンティックな香に現に叫ばれてゐる道路改良の見地からである。かゝる物語はまごころに珍らしい。「七十翁が獨力で」。センチシヨナルな題目である。この山中翁のやうな人が多かつたら、日本の道路はもつぎよくなるらう。百人の、いや千人の、萬人の、山中翁出でよ。

x x x x

翁が里道を改修してから八年になる。村人は非常なる利便を得て居る。かつて白眼もて迎へた村人も今は心からの

尊敬と感謝をこの老翁に捧げて居る。流石氣丈夫なる翁も寄る年波には如何とすることも出来ないうで、老衰は日ご共に募り、今では身動きも出来ぬ位に衰耗した。八十五才の翁は僅かに身を容るゝに足る程の荒屋にその老軀を横へ靜かに壽命の終るのを待つて居る。村でも翁の善行に感じ毎年五十圓宛を支出して居り、又島泊の部落民は交るゝ翁のために薪水其他一切の勞を採つて、よくその世話をして居る。まことに美しい情誼ではないか。

この南隅の昭和の「禪海和尚」よ。安らげくあれ。

× × × ×

この美談は八年後の今日世に知られた。それは鹿兒島縣廳の加治屋社會教育主事が調査して來て知事に上申した。後藤知事は深くこの德行に感じて、六月四日、山中市太郎翁に對し二十圓を贈つて表彰した。知事を行ふ表彰としては、此の金額は最高のものださうである。その表彰狀は左の通りであつた。

高知縣幡多郡姫ノ上村

山中市太郎

資性溫厚篤實ニシテ夙ニ公益事業ノ精神ニ燃ヘ縣下 佐多村伊座敷島泊間ノ道路險惡ニシテ人馬ノ通行困難ナルヲ慨シ大正七年八月ヨリ老軀ヲモ不顧敢然 自己ノ資産ヲ抛テ延長貳里ノ里道開鑿ニ着手シ以來孜々トシテ大正九年五月二年ノ屋霜ヲ重ネ遂ニ予定ノ竣功ヲ遂ケ運輸交通ヲ便ナラシメ公衆ノ利便ハ素ヨリ其ノ勞功洵ニ顯著ナリトス依ツテ褒彰條例ニ依リ金二十圓ヲ賜ヒ以テ之ヲ表彰ス

昭和三年六月四日

鹿兒島縣知事正五位勳五等後藤多喜藏